



歴史文化ライブラリー

110

仏画の見かた

描かれた仏たち

中野照男

吉川弘文館



歴史文化ライブラリー

仏画の見かた

野照男

江苏工業学院図書館

蔵書章

110

携れた仏たち

吉川弘文館

著者紹介

一九五〇年、福岡県に生まれる

一九七三年九州大学大学院文学研究科哲学哲学史専攻修士課程修了

東京国立博物館を経て

現在、東京国立文化財研究所美術部第一研究室長

主要著書・論文

中国石窟クムトラ石窟 閻魔・十王像

二神将像



歴史文化ライブラリー

110

仏画の見かた

描かれた仏たち

二〇〇一年(平成十二)一月一日 第一刷発行

著者 なかの 野照男

発行者 林 英男

発行所 編集 吉川弘文館

東京都文京区本郷七丁目二番八号

郵便番号 一一三〇〇三三

電話 〇三―三八―三九一五(代表)

振替口座 〇〇―一〇〇―五―二四四

印刷 平文社 製本 ナショナル製本

装幀 山崎 登

© Teruo Nakano 2001. Printed in Japan

ISBN4-642-05510-X

〔R〕 <日本複写権センター委託出版物>

本書の無断複写(コピー)は、著作権法上での例外を除き、禁じられています。複写を希望される場合は、日本複写権センター(03-3401-2382)にご連絡下さい。

目次

仏画の内容を知ること―プロローグ……………1

釈尊から仏陀へ

朝鮮の釈迦誕生図……………10

シルクロードの仏伝図……………24

浄土のイメージ

法隆寺金堂壁画……………56

此岸から彼岸へ渡る……………74

仏教を守護するものたち

十二神将のかたちと役割……………86

六道の苦しみからの救済

説法する地藏菩薩……………132

餓鬼に食を施す

.....

163

あとがき

参考文献

仏画の内容を知ること——プロローグ

展覧会の解説文

わたしは、以前、博物館に勤めていた。展覧会にたくさんかわり、展覧会のカタログの作品解説もいろいろと書いた。わたしは、たとえ

ば仏教絵画を扱った展覧会であれば、出陳作品しゅつちんの解説を書くときには、たいていつぎのようにする。全体を三つの部分にわけ、まず最初にその作品の図像学的な意味を簡潔に書く。その作品は何を表現しているのか、その作品の主題や内容は何かということである。

続いて、技法や表現の特徴に留意しつつ、その作品を記述する。主題をどのように表現しているかということである。最後にその作品を美術史的に価値づける。なぜこの作品がすばらしいのか、なぜこの作品は展覧会に陳列するのにふさわしいのか、という具合にその

作品を評価することである。簡単に言えば、誰が、何を、どのように描いたか、そしてそれは美術の歴史のなかでどのような価値をもっているかを記述して、解説とするわけである。仏教絵画の場合、誰が描いたかはわからないことが多いので、最初の「誰が」の部分はたいてい欠けることになる。

日本では、解説文は、あまり長すぎないことが好まれる。字数に制限がなく、思いのままに長く書くことができるのはまれである。さっと読むことができて、そして必要不可欠な情報が的確に伝えられる、そういうコンパクトな解説が求められる。同時に、解説文は、一般の観客に理解されやすいように、やさしく書くことが求められる。これが大変むずかしい。やさしく書こうとすれば、おのずと長くなる。短くまとめようとすると、必然的に専門の用語に頼ることになり、むずかしくなる。展覧会にかかわり始めた当初は、どのように書くべきか、ずいぶん悩みもしたが、長すぎず、むずかしすぎずという相反する要求の間で上手にバランスを取りながら解説文を書くことに、わたし自身、だんだんと慣れてきて、またある意味ではそれが一種のスタイルともなつて、思い悩むことも少なくなつてきた。

日本人の仏教 理解は深い

ところが、そういう慣れに反省を強いられる出来事があった。一九八八年に、ドイツのケルンの東洋美術館において密教美術の展覧会（SHIN-GON, Die Kunst des Geheimen Buddhismus in Japan）が開催された。展

覧会カタログの作品解説は、あらかじめ日本側で原稿を用意することになった。わたしたちは、いつものとおりの長すぎない簡潔な解説文を用意した。むしろ、外国の人に読ませるのであるから、いつもよりは短かったかもしれない。その解説文が、ケルンの東洋美術館のロジャー・ゲツパー館長に届いたとき、即座に館長から指摘された。日本においてこの展覧会が開催されるのであれば、日本では仏教に関して基礎的な知識をもった人が多いだろうから、このような専門的な解説文でも容易に理解されるであろうが、ドイツではそれは無理である。まず仏教に関する基礎的な知識から説き始めなければならない。たとえば、密教の尊像の一つを取り上げたときにも、まずその尊像の名前の意味、その尊像が密教のなかで果たす役割、その尊像の姿や形、持ち物など、きわめて基本的なことから説明する必要があるというのである。ゲツパー館長のご尽力によってできあがったカタログは、作品の一点一点に詳細な解説の付された大部のものとなっていた。心やさしい館長は、日本のみなさんが用意してくれた解説文を大いに参照させてもらい、かつカタログの解説文

のなかに織り込んだと言つて、慰めてくださったが、そのドイツ語版のカタログは、日本側がイメージしていたものとはかなり異なる形のものであった。

そのときに思った。本当にドイツと日本では事情が違うのであろうか。ドイツ人よりも日本人の方が確かに仏教については詳しいのかもしれないが、それは本当に体系的な知識なのであろうか。わたしは、日本人の仏教に対する基礎的な知識、常識といったものに頼つて、本来解説すべき内容を故意に、あるいは不用意に割愛してはいないだろうか。また、わたしが伝えたいと思つたことは本当に伝わっているものであろうか。わたしは、日本人に對しても、仏画の内容、その技法上の特色、評価について、もっと詳細に語るべきではないだろうか。

仏画の何を見るか

本書は、この反省に立つて、仏画の内容についてできる限り詳しく語ろうとしたものである。多くの仏画には典拠となつたお経がある。

この典拠となつたお経の内容を絵画化したものを、経変、あるいは変相図とよぶ。したがつて、典拠となつた経典を探し出せば、その仏画の内容を詳しく読み解くことが可能となる。しかし、典拠を見出すことのできない仏画もないわけではない。それは、単純に、現在まで典拠が見出されていないだけかもしれない。また、経典という形にまとめられてい

ない民間の信仰に基づいて作られた仏画であるかもしれない。あるいは、作画や造像の方が早く、その像をどのような形に表すかについての取り決めや規則が、その作画や造像を追認する形で、後にまとめられたという場合もあるだろう。典拠の經典が見出されない仏画については、このような事情についてできうるかぎり、明らかにしたいと考えた。

仏画の世界を語るに際して、その素材に何を取り上げるかについては、結果的には非常に恣意的になってしまった。しかし、できるかぎり、仏画の世界を体系的に示すことができるように心がけた。仏画に登場する尊像は、仏、菩薩、明王、天などである。簡単に説明すれば、仏は悟りを得た存在、菩薩は目下修行中の存在、あるいはすでに悟りを得る境地に達しているが、衆生、すなわちこの世の人々を悟りに導くために、あえて修行中の位に身を置く存在、明王は力でもって衆生を悟りに導く存在、天は仏教世界を守護する神である。その他、仏画には羅漢、祖師なども登場する。限られた紙数の中では、すべてを取り上げることはできない。ここで取り上げるのは、つぎの尊像を取り扱った仏画である。

① 歴史的な存在としての釈尊^{しやくそん}

② 抽象化された、法としての存在の仏陀

③ 仏陀の住処^{すみか}である浄土

④彼岸の仏である阿弥陀仏

⑤眷属、分身、衆生の守護者など、種々の役割をもつ十二神将

⑥救済者としての地藏菩薩

⑦救済の本尊としての役割を身につける餓鬼

①から④は仏、⑥は菩薩、⑤は天にかかわるものである。⑥は同時に六道ろくどう絵（生きものが輪廻りんね転生する六つの世界のありさまを描いた絵）にもかかわる。⑦は六道にかかわるとともに、道教の信仰にも関わるものである。

いちおうこれらによつて、仏、菩薩、天の性格、その姿や形の一部をかいま見ることができるであろう。しかし、明王や曼荼羅まんだらなど、仏画の他の重要な分野については、今回取り上げることができなかったことをあらかじめお断りしたい。

加えて、もう一つお断りしておきたい。それは、仏画の制作された地域を統一しなかったことである。今回取り上げた仏画は、日本、朝鮮、中国、中央アジアなどで制作されたものである。わたしの能力では、一つの地域に限って、仏画の世界の多様性を示すことはできないと考えた。また、わたしは、他の地域で制作された仏画が、たとえば日本おいてどのように受容されたのかという問題について関心をもっており、そのためには複数の地

域を取り上げたいと考えた。日本に伝来した朝鮮の釈迦誕生図、中国の孤魂（餓口餓鬼）図などを取り上げるのは、その関心に基づく。その仏画は、制作地においてどのような目的でつくられたのか、その仏画は日本において積極的に受け入れられたのかなどの問題について可能なかぎり答えを見出そうとした。主題の面でも、地域の面でも不統一の感はないが、かえって普段はあまり目にしない作品も含まれることになり、仏画の多彩な世界をみていただけることになったのではないだろうか。

釈尊から仏陀へ

朝鮮の釈迦誕生図

本岳寺の釈 迦誕生図

福岡市の蓮池にある本岳寺ほんがくじには、釈迦の誕生の場面を丹念に描いた李氏朝鮮時代の画幅が伝えられている。絹本著色、縦一四五・〇チセン、横一〇九・五チセンの掛幅で、左辺の下部の一部に後補が認められるが、それ以外は保存状態のよい画幅である。

仏伝図ぶつでんずは朝鮮仏画のなかでは重要な位置を占めている。朝鮮の寺院では、釈迦如来像を安置する大雄殿たいゆうでんを正面に置き、その脇に八相殿はつそうでんを配置して、そのなかに釈迦八相図しゃかはつそうずをおさめる例がある。そのほか、釈迦八相図は、全羅南道順天郡の松広寺にみられるように、釈迦の説法と深く関連する霊山殿にまつられる例もある。

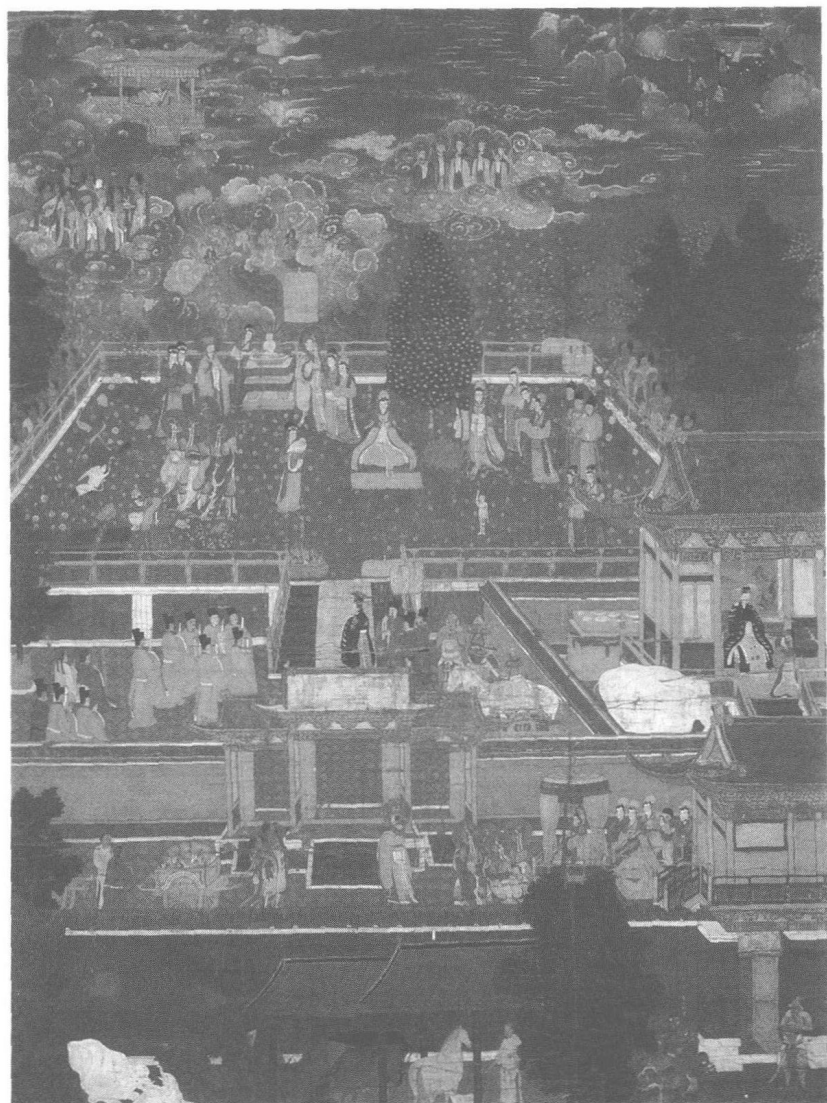


図1 釈迦誕生図（福岡、本岳寺）